

## IV. ステップファミリーにおけるストレスとサポート・ネットワーク

この章では、①心理的なストレスの原因となる出来事の程度やその結果としての心理・身体的なストレス反応や家族関係満足度、②パートナーとの援助的および対立的な関係、③パートナー以外のサポート提供者のネットワーク特性について検討する。これら①～③が、性別、年齢、結婚・同居年数、家族類型などの個人・家族特性の違いによってどのような差異がもたらされるのか、つまりどのような個人や家族がストレスの影響を受けやすく、またそれを支えるサポートを得やすいのか、という条件を探索していきたい。さらに、①に含まれるストレス反応や家族関係満足度のような、家族生活状況への心理的な適応状態を示す指標が、②や③のサポート・ネットワークの条件によってどのように規定されているかを検討する。

ここで取り上げる個人・家族特性に関する変数は、回答者の性別、回答者とパートナーの年齢、結婚年数と同居年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無、の7変数である。日本の全国家族調査（NFR98）データに基づく分析は、離婚・再婚という経験が心理的なストレス反応（ディストレス）に与える影響には男女によって大きな違いがあり、男性に比べて再婚した女性あるいは継母のディストレスがとくに高いことを指摘している（稲葉, 2001; 西村, 2001）。この分析でも性別（ジェンダー）による差異はひとつの焦点になる。今回の調査回答者数が女性に偏っており（83人、全体の73.5%）、男性回答者（30人、26.5%）が少ない点で結果の一般化には注意しなければならないが、性別によって傾向が異なる場合には男女別に分析結果を提示することにしたい。

### 1. 家族生活とストレス状況

#### (1) 家族の内と外のストレス源

調査の対象となったステップファミリーの方々が、日常生活を営んでいく上で経験する人間関係上の出来事の中でストレス源となることが予想される9項目を想定して、過去1ヶ月間における経験頻度を4段階で回答してもらった（問13）。これらのストレス源は、内容的に2つのストレス源に分類することができる。

一つは、より狭い範囲の「家族」の人間関係から生じる「家族内ストレス源」である。問13の次の4項目、(a)家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと、(b)パートナーとの関係で悩んだこと、(d)子ども（継子を含む）との関係で悩んだこと、(e)自分が「家族に理解されていない」と感じたこと、がそれにあたる。この4項目に挙げたことが過去1ヶ月間にあった頻度に従って、「全くなかった」（1点）から「何度もあった」（4点）までの点数を与えて、その平均値を「家族内ストレス源」の尺度にした（信頼性係数 $\alpha=.78$ ）。

もう一つは、直接の家族を越えた、より広い範囲の人間関係から生じる「家族外ストレス源」である。問13のうち、(c)自分または現在のパートナーの元のパートナーとの関係で悩んだこと、(f)自分の親や親戚との関係で悩んだこと、(g)パートナーの親や親戚との関

係で悩んだこと、(h)近所の人や子どもの学校関係の人との関係で悩んだこと、(i)職場での人間関係で悩んだこと、の5項目がそれにあたる。それぞれ過去1ヶ月間にあった頻度に従って、「全くなかった」(1点)から「何度もあった」(4点)の点数を与え、その平均値を「家族外ストレス源」の尺度とした(信頼性係数 $\alpha=.58$ )。

家族内ストレス源と家族外ストレス源の記述統計量を表IV-1に示した(この2つの尺度の詳細についてはV章を参照)。

**表IV-1 家族内・家族外ストレス源の記述統計**

|          | 度数  | 最小値  | 最大値  | 平均値  | 標準偏差 |
|----------|-----|------|------|------|------|
| 家族内ストレス源 | 112 | 1.00 | 4.00 | 2.30 | .86  |
| 家族外ストレス源 | 112 | 1.00 | 3.80 | 1.80 | .63  |

### ①家族内ストレス源

さて、現在のパートナーとの関係や、継子を含む子どもとの関係など、家族内役割に関わる「家族内ストレス源」の多寡と比較的強い関連があるのは、性別、パートナーの年齢、前の結婚での子どもの有無、である(以下、分散分析による検定結果が $p<.10$ であることを基準とした)。

男女別では、男性よりも女性の方が家族内のストレス源を多く感じている(表IV-2)。また、本人の年齢との関連はほとんどないが、パートナーの年齢との関連はかなり強い(表IV-3)。パートナーが最若年層の20歳代で家族内ストレス源の経験度がもっとも低く、パートナーが40歳代前半層でもっとも高い。だが、45歳以上ではやや低くなる。また、前の結婚での子どもが自分とパートナーのどちら(あるいは両方)にあるかという違い別に比較しても、家族内ストレス源の経験度に差がある(表IV-4)。前の結婚での子どもが、パートナーにだけある場合に家族内ストレス源はもっとも高くなり、自分にだけある場合にもっとも低くなる。双方にある場合には、そのほぼ中間の値になる。

男女別に分析してみると、前の結婚での子どもの有無の影響に関しては性別との交互作用があることがわかった(図IV-1)。この男女別のグラフを見ればわかるように、男性においては自分が結婚時に継父・実父どちら(あるいは両方)の立場であっても家族内ストレス源の高さはほとんど変わらないが(分散分析による検定 $F=.15$ , n.s.; 相関比 $\eta=.10$ )、女性は結婚時に継母であって実母ではなかった場合にとくにストレス源が高くなる傾向がある( $F=3.9$ ,  $p<.05$ ;  $\eta=.30$ )。つまり、この傾向は女性に特有のものであるようだ。

**表IV-2 男女別・家族内ストレス源の平均値**

| 本人の性別 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|-------|------|-----|------|
| 男性    | 1.99 | 30  | .78  |
| 女性    | 2.41 | 82  | .86  |
| 合計    | 2.30 | 112 | .86  |

注) 分散分析による検定  $F=5.56$ ,  $p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$

**表Ⅳ-3 パートナーの年齢別・家族内ストレス源の平均値**

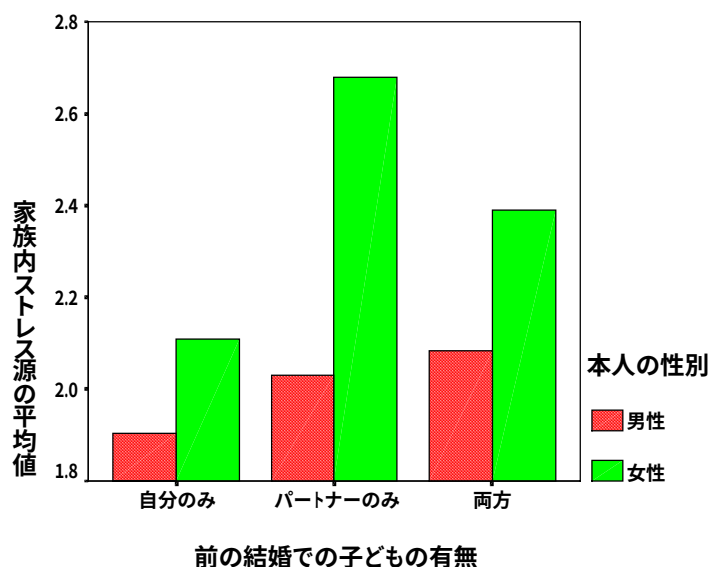
| パートナーの年齢 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------|------|-----|------|
| 20-29 歳  | 1.80 | 15  | .68  |
| 30-34 歳  | 1.98 | 31  | .76  |
| 35-39 歳  | 2.56 | 31  | .83  |
| 40-44 歳  | 2.72 | 25  | .81  |
| 45 歳以上   | 2.20 | 10  | .91  |
| 合計       | 2.30 | 112 | .86  |

注) 分散分析による検定  $F=5.39$ ,  $p<.01$ ; 相関比  $\eta=.41$

**表Ⅳ-4 前の結婚での子どもの有無別・家族内ストレス源の平均値**

| 前の結婚での子どもの有無   | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------------|------|-----|------|
| 前の結婚の子は自分のみ    | 2.05 | 43  | .82  |
| 前の結婚の子はパートナーのみ | 2.56 | 44  | .85  |
| 前の結婚の子が両方にある   | 2.28 | 25  | .83  |
| 合計             | 2.30 | 112 | .86  |

注) 分散分析による検定  $F=4.17$ ,  $p<.05$ ; 相関比  $\eta=.27$



**図Ⅳ-1 男女別・前の結婚での子どもの有無別・家族内ストレス源**

## ②家族外ストレス源

家族外のストレス源に関してはどうだろう。直接の家族関係の外側にある人間関係に関するストレスは、性別をはじめとする上記の3変数との関連は小さかった。一方、同居年数と現在のパートナーとの間に子どもがあるかどうかに関連を持っているという点で、家族内ストレスとの違いを見せている。

同居年数の影響について見てみよう(表Ⅳ-5)。自分やパートナーの親や親戚、前のパー

トナーとの関係などから生じるストレスフルな出来事は、まだパートナーと完全に同居する段階に至っていない場合にもっとも多く経験される。そして、同居することになって間もない段階（1年未満）ではそれが減少し、その後1年から4年くらいの間に微増したのち、4年目以降にやや少なくなる。基本的には、同居に至るまでの間に、当事者以外の親族・非親族との関係がストレス源となることが多いということがわかる。逆にいえば、こうした周囲との関係をうまく調整することができて初めて同居に至ることができるのだらう。

家族外のストレス源は、現在のパートナーとの間に子どもが生まれている場合の方が、そうでない場合よりも少ないと感じられている（表IV-6）。夫妻のどちらかが子どもを連れて再婚したのちにその夫婦に生まれる子どもを「セメント・ベイビー」と呼ぶことがあり、それによって家族関係が強化されると言われることがある。少なくとも、家族の外側にある人間関係が生み出すストレス源が減退するという面では、そうした効果を認めることができそうだ。

**表IV-5 同居年数別・家族外ストレス源の平均値**

| 同居年数    | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|---------|------|-----|------|
| 未同居／半同居 | 2.14 | 25  | .76  |
| 1年未満    | 1.60 | 21  | .55  |
| 1-2年未満  | 1.85 | 15  | .53  |
| 2-4年未満  | 1.86 | 25  | .64  |
| 4年以上    | 1.52 | 24  | .44  |
| 合計      | 1.80 | 110 | .64  |

注）分散分析による検定  $F=3.90, p<.01$ ; 相関比  $\eta=.36$

**表IV-6 パートナーとの間の子どもの有無別・家族外ストレス源の平均値**

| パートナーとの間の子どもの有無 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|-----------------|------|-----|------|
| なし              | 1.90 | 74  | .64  |
| あり              | 1.61 | 38  | .56  |
| 合計              | 1.80 | 112 | .63  |

注）分散分析による検定  $F=5.70, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$

## (2) ストレス反応と家族関係満足度

ここでストレス反応と言っているのは、抑鬱、不安、身体的症候などの具体的な指標によって測定される、「不快な主観的状态」のことであり、ディストレス（distress）という用語で呼ばれることもある。問28の16項目に関して、この1週間にどのくらい経験したかという質問に対する回答によって測定されている。「全くなかった」（1点）から「ほとんど毎日」（4点）の4段階の点数を16項目について平均したものである（ $\alpha=.90$ ）。

一方、家族関係満足度は、問29の3項目、(a)自分と子ども（継子を含む）との生活、(b)

パートナーと子ども（継子を含む）との関わり、(c)自分とパートナーとの関係、についての満足度を「不満である」（1点）から「満足している」（4点）までの4段階で尋ね、4項目の平均値を尺度としたものである（ $\alpha=.79$ ）。

ストレス反応と家族関係満足度の記述統計量を表IV-7 に示した。これら2つの尺度は、現在の生活への適応状態の程度を、前者は個人の心理・身体の否定的な側面から、後者はとくに家族関係についての肯定的（満足の）側面から測定している。したがって、両者には強い負の相関がある（相関係数  $r=.58$ ,  $p<.001$ ）。（これら2つの尺度の詳細についてもV章を参照。）

### ①ストレス反応

個人・家族特性に関わる変数のうち、ストレス反応に関わるのは、性別と本人の年齢であった。性別に関しては、家族内ストレス源の場合と同様に、女性の方がストレス反応もやや高い（表IV-8）。また、本人の年齢に関しては、年齢が低い人ほどストレス反応が高く、年齢が高い人ほどストレス反応が低いという傾向が見られた（表IV-9）。

### ②家族関係満足度

家族関係満足度は、ストレス反応とは逆に、女性よりも男性の方が高い（表IV-10）。このほかに、家族関係満足度に影響を与えている個人・家族特性変数は、パートナーの年齢、前の結婚での子どもの有無、の2変数である。この2変数は、前出の家族内ストレス源の場合ときわめて対照的な関連を示している。パートナーの年齢がもっとも若い層で家族関係満足度がもっとも高く、年齢が高くなるにしたがって満足度は低下するが、45歳以上の層では再び満足度が高くなっている（表IV-11）。一方、前の結婚での子どもが自分にだけある場合に家族関係への満足はもっとも高く、パートナーにだけ子どもがある場合にもっとも低くなる傾向がある（表IV-12）。この変数は、家族内ストレス源と裏表の関係にあるようだ（相関係数  $r=-.71$ ,  $p<.001$ ）。

男女別の分析からは、以前の結婚での子どもの有無の効果は女性のみに見られるものであることがわかった。図IV-2のグラフを見ると、男性の家族関係満足度は、前の結婚での子どもがどちらにいてもほとんど関わりなく一貫して高い（ $F=.35$ ,  $n.s.$ ;  $\eta=.16$ ）のに対して、女性は結婚前にパートナーにのみ子どもがいた場合にとくに低くなる（ $F=4.06$ ,  $p<.05$ ;  $\eta=.31$ ）。これは、家族内ストレス源に関する分析結果と平行な、女性のみに顕著な現象だと言えるだろう。

**表IV-7 ストレス反応・家族関係満足度の記述統計**

|         | 度数  | 最小値  | 最大値  | 平均値  | 標準偏差 |
|---------|-----|------|------|------|------|
| ストレス反応  | 106 | 1.00 | 3.63 | 1.96 | .59  |
| 家族関係満足度 | 108 | 1.00 | 4.00 | 2.91 | .83  |

**表Ⅳ-8 男女別・ストレス反応の平均値**

| 本人の性別 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|-------|------|-----|------|
| 男性    | 1.79 | 29  | .55  |
| 女性    | 2.03 | 77  | .60  |
| 合計    | 1.96 | 106 | .59  |

注) 分散分析による検定  $F=3.64$ ,  $p<.10$ ; 相関比  $\eta=.18$

**表Ⅳ-9 本人の年齢別・ストレス反応の平均値**

| 本人の年齢   | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|---------|------|-----|------|
| 20-29 歳 | 2.24 | 18  | .67  |
| 30-34 歳 | 2.02 | 38  | .54  |
| 35-39 歳 | 1.89 | 26  | .56  |
| 40-44 歳 | 1.78 | 16  | .53  |
| 45 歳以上  | 1.66 | 8   | .68  |
| 合計      | 1.96 | 106 | .59  |

注) 分散分析による検定  $F=2.19$ ,  $p<.10$ ; 相関比  $\eta=.28$

**表Ⅳ-10 男女別・家族関係満足度の平均値**

| 本人の性別 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|-------|------|-----|------|
| 男性    | 3.24 | 29  | .81  |
| 女性    | 2.78 | 79  | .81  |
| 合計    | 2.91 | 108 | .83  |

注) 分散分析による検定  $F=6.72$ ,  $p<.05$ ; 相関比  $\eta=.24$

**表Ⅳ-11 パートナーの年齢別・家族関係満足度の平均値**

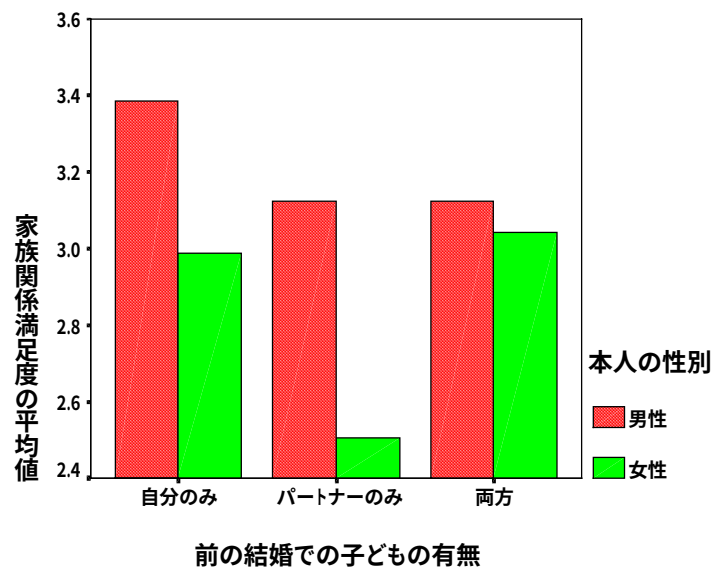
| パートナーの年齢 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------|------|-----|------|
| 20-29 歳  | 3.53 | 15  | .59  |
| 30-34 歳  | 3.08 | 30  | .75  |
| 35-39 歳  | 2.63 | 31  | .82  |
| 40-44 歳  | 2.52 | 22  | .84  |
| 45 歳以上   | 3.17 | 10  | .72  |
| 合計       | 2.91 | 108 | .83  |

注) 分散分析による検定  $F=5.53$ ,  $p<.001$ ; 相関比  $\eta=.42$

**表Ⅳ-12 前の結婚での子どもの有無別・家族関係満足度の平均値**

| 前の結婚での子どもの有無   | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------------|------|-----|------|
| 前の結婚の子は自分のみ    | 3.11 | 41  | .81  |
| 前の結婚の子はパートナーのみ | 2.62 | 43  | .87  |
| 前の結婚の子が両方にある   | 3.07 | 24  | .68  |
| 合計             | 2.91 | 108 | .83  |

注) 分散分析による検定  $F=4.56$ ,  $p<.05$ ; 相関比  $\eta=.28$



図IV-2 男女別・前の結婚での子どもの有無別・家族関係満足度

### (3) まとめ

最近の全国調査データの分析からは、男性の再婚者はストレス反応が低い、女性の再婚者はストレス反応が高いこと（稲葉, 2001）や、継子との関係をもつ場合でも女性にだけ家族生活ストレーン（緊張）が高いこと（西村, 2001）が示唆されている（Ⅱ章の表Ⅱ-1を参照）。継父に比較して継母のストレスがとくに高いことは米国の諸研究からも明らかになっており、母性を強調する社会規範が根強いこと、継父よりも継母の方が継子の実親との競合関係に巻き込まれやすいことなどがその要因と考えられている（Nielsen, 1999）。今回の調査からもこの点でのジェンダー差（男女差）が確認された。家族関係から生じるストレスや満足に関する分析は、現在のパートナーとの関係以前に出産や子育ての経験がない女性が継母という役割を担うことが、もっとも大きなストレス状況（家族関係に関する悩みや不満）を生み出すことを示唆している。男性にはこのような傾向はみられない。

家族関係のストレスや満足はパートナーの年齢とも関係している。ただし、パートナーが40歳前後で家族関係のストレスが高まり、満足が低下するのはステップファミリーに固有の現象なのかどうかは検討の余地がある。

もうひとつ興味深いのは、現在のパートナーとの間に子どもがいることが、自分を取り囲むやや広い社会的関係のネットワーク（親族、近隣・子どもの学校、職場、元配偶者を含む）との関係から生じるストレス（悩み）を減少させるようにみえる点である。現在のパートナーとの間に子どもが生まれることは、少なくとも親の立場から見れば、社会（あるいは「世間」と言い換えてもいいだろう）に対する家族の安定をもたらすようだ。もちろん、一時点の調査データによって子どもの出産がもたらす家族内・家族外の人間関係の変容過程を捉えることはできない。この点は、時系列データや個別インタビュー・データなどによってさらに追究すべき論点である。

## 2. パートナーとの関係 ―サポート・葛藤・同伴行動―

次に、パートナーとの関係について、①パートナーからのサポート、②パートナーとの葛藤、および③パートナーとの同伴行動という3側面から検討してみたい。

ここでパートナーからのサポート（support=支援・支持）と呼んでいるのは、パートナーが「心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」、「能力や努力を高く評価してくれる」、「助言やアドバイスをしてくれる」（問 10）の3項目について、自分のパートナーについての回答を、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）までの4段階で得点化し、それを平均したものである（信頼性係数 $\alpha=.80$ ）。この点数が高いことは、情緒的・心理的にパートナーに支えられ、肯定されていると認知していることを示している（これら3つの変数については、VI章を参照）。

一方、パートナーとの葛藤（conflict=対立・衝突）とは、パートナーが「イライラさせる」、「いろいろと面倒をかける」、「文句や小言をいう」（同じく問 10）の3項目について、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）までの4段階で得点化し、それを平均したものである（ $\alpha=.72$ ）。この尺度の得点が高いことは、パートナーとの関係が自分にとって否定的な側面をもつと認知されていることを示している（しかし、その関係が重要でないという意味ではなく、むしろ重要であるからこそこの得点が高くなるという場合もあるだろう）。

同伴行動は、パートナーと一緒に行動したり、何かを楽しんだりする程度、つまりコンパニオンシップ（companionship=伴侶性）の程度を示す測度である。ショッピング、旅行・ドライブ、友人とのカップル単位の交際、共通の趣味という、問 11 の4項目について「そのようなことはない」（1点）から「よくある」（4点）までの4段階で点数化してその平均値を求めた（ $\alpha=.77$ ）。

**表IV-13 パートナーとの関係についての変数の記述統計**

|              | 度数  | 最小値  | 最大値  | 平均値  | 標準偏差 |
|--------------|-----|------|------|------|------|
| パートナーからのサポート | 113 | 1.00 | 4.00 | 3.32 | .70  |
| パートナーとの葛藤    | 113 | 1.00 | 4.00 | 2.27 | .77  |
| パートナーとの同伴行動  | 112 | 1.00 | 4.00 | 2.98 | .69  |

以上3つの変数についての記述統計量を表IV-13 に示した。ステップファミリーメンバーのうち、パートナーからの（情緒的な）サポート、パートナーとの葛藤、パートナーとの同伴行動が多いのはどのような条件にある人たちなのだろうか。先の7つの要因（性別、本人とパートナーの年齢、同居年数、結婚年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無）を検討してみた。その結果、パートナーからのサポートは、同居年数、結婚年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無の4つの変数と関連があった。また、パートナーとの同伴行動は、同居年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無の3つの変数と関連があった。ただし、



パートナーとの葛藤についてはどの変数ともほとんど関連がみられなかった。パートナーとの葛藤の程度は、取り上げた個人・家族特性とは別の要因に規定されているようだ。そこで以下では、パートナーからのサポートと同伴行動についてのみ詳しく取り上げよう。

### (1) パートナーからのサポート

まず、同居年数別に、パートナーからのサポートについて見てみよう（表IV-14）。パートナーからのサポートの程度は、（まだ）同居生活をしていないグループと同居年数1年以上2年未満のグループでやや低く、1年未満と4年以上のグループで高くなるというM字形の変化を見せる。一方、結婚年数による違いに関しては（表は示さないが）、未入籍・非入籍のグループではサポートが高くなっている点が異なるが、結婚1～2年でパートナーからの情緒的サポートが減少し、その後再度上昇したのちにさらに減少に転じる点は同居年数のパターンと同様である（ $F=2.68, p<.05; \eta=.30$ ）。いずれにしても、結婚前後の時期には、（同居していない場合を除いて）パートナーからの支えを感じる人が多いが、その直後に減少、さらに増加というように、変化の波を経験するように見える。

また、パートナーからのサポートの程度は、以前の結婚での子どもや現在のパートナーとの子どもがいるかどうかという（継）親子関係の差異によっても変化する。パートナーからのサポートの程度は、前の結婚での子どもが自分にはなく相手にだけある場合にもっとも低く、自分とパートナーの双方にある場合にもっとも高い（表IV-15）。ただし、この傾向は女性だけにあてはまるものであり、男性にはあてはまらない。図IV-3のグラフを見ると、男性の場合は、前の結婚での子どもが自分のみにある場合にパートナーからのサポートがもっとも少なく、双方にある場合にもっとも多いと知覚されている（ $F=2.67, p<.10; \eta=.41$ ）。女性では、相手にのみ前の結婚での子どもがある場合にパートナーからのサポートがもっとも少ないと感じられ、双方にある場合にもっとも多いと認知されている（ $F=3.84, p<.05; \eta=.30$ ）。つまり、カップルの男女双方に前の結婚での子どもがある場合にはパートナー間の情緒的サポートが相対的に高くなるが、男性側にのみ子どもがいるカップルの組み合わせでは相互の情緒的支え合いは低くなる傾向にある。女性側にのみ子どもがいる場合はその中間に位置づけられる。

現在のパートナーとの間に子どもがあるかどうかという点も、男女で傾向が異なる。回答者全体で見ると、現在のパートナーとの間に子どもがいるグループの方が、いないグループよりもサポートが多い（表IV-16）。しかし、男女別に比較したグラフ（図IV-4）を見ると、男性ではパートナーとの間の子どもの有無にかかわらずパートナーからの情緒的サポートの程度にあまり差異がないが（ $F=.64, n.s.; \eta=.15$ ）、女性ではパートナーとの間に子どもがあるグループの方がパートナーからのサポートが少ないと感じる傾向が顕著である（ $F=14.3, p<.001; \eta=.39$ ）。この結果から見る限り、現在のパートナーとの間の子どもの存在は男性パートナーからのサポートをむしろ減じているようだ。この点も女性に特有の現象であり、ジェンダー差が確認された。

**表Ⅳ-14 同居年数別・パートナーからのサポートの平均値**

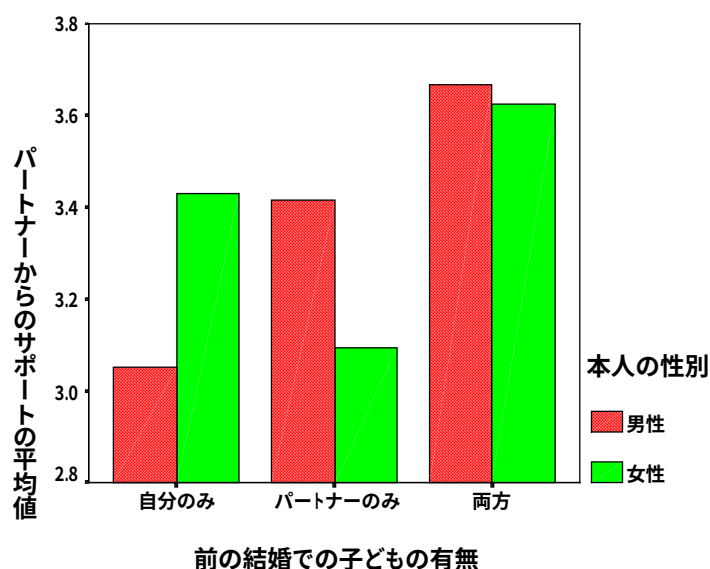
| 同居年数    | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|---------|------|-----|------|
| 未同居／半同居 | 3.22 | 26  | .84  |
| 1年未満    | 3.57 | 21  | .58  |
| 1-2年未満  | 2.98 | 15  | .61  |
| 2-4年未満  | 3.56 | 25  | .52  |
| 4年以上    | 3.18 | 24  | .76  |
| 合計      | 3.32 | 111 | .70  |

注) 分散分析による検定  $F=2.82, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.31$

**表Ⅳ-15 前の結婚での子どもの有無別・パートナーからのサポートの平均値**

| 前の結婚での子どもの有無   | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------------|------|-----|------|
| 前の結婚の子は自分のみ    | 3.32 | 44  | .68  |
| 前の結婚の子はパートナーのみ | 3.15 | 44  | .79  |
| 前の結婚の子が両方にある   | 3.64 | 25  | .43  |
| 合計             | 3.32 | 113 | .70  |

注) 分散分析による検定  $F=4.07, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.26$

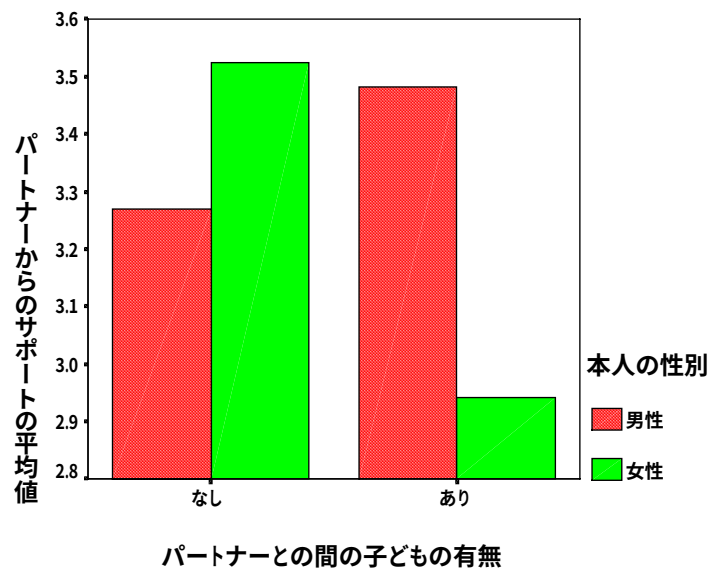


**図Ⅳ-3 男女別・前の結婚での子どもの有無別・パートナーからのサポート**

**表Ⅳ-16 パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーからのサポートの平均値**

| パートナーとの間の子どもの有無 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|-----------------|------|-----|------|
| なし              | 3.45 | 75  | .60  |
| あり              | 3.07 | 38  | .82  |
| 合計              | 3.32 | 113 | .70  |

注) 分散分析による検定  $F=7.98, p<.01$ ; 相関比  $\eta=.26$



図IV-4 男女別・パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーからのサポート

## (2) パートナーとの同伴行動

パートナーとの同伴行動も、同居年数と関連があった。同居年数の違いによって M 字形をなしていたパートナーからのサポートの場合と比較すると、パートナーとの同伴行動は、同居年数 1～2 年グループの谷間はなく、非同居グループと同居 4 年以上グループで同伴行動がやや少なくなるという台形状の変化を示している（表IV-17）。

子どもの構成別では、パートナーには前の結婚での子どもがいたが自分にはいなかったグループで同伴行動がもっとも少なく、自分とパートナーの両方に前の結婚での子どもがいるグループでもっとも多い（表IV-18）。ただし、この点についても男女間に異なるパターンが表れる。男女別に前の結婚での子どもが夫婦のどちらにあるかによってパートナーとの同伴行動がどう違うかを比較した図IV-5 のグラフは、男女間に見られる傾向が対照的であることを示している。男性の場合、パートナーにのみ以前の結婚での子どもがあるグループでもっとも同伴行動が多くなっているが、3つのグループ間の差は大きくない（ $F=.52$ , n.s.;  $\eta=.19$ ）。それに対して女性の場合は、逆にパートナーにのみ以前の結婚での子どもがあるグループでもっとも同伴行動が少なくなっており、他の 2 つのグループとは統計的にも有意な差がある（ $F=4.75$ ,  $p<.05$ ;  $\eta=.33$ ）。

さらに、現在のパートナーとの間に子どもがいないグループの方が、いるグループよりも同伴行動が多いという傾向も見出された（表IV-19）。そして、この点も女性だけに顕著な傾向である。図IV-6 のグラフに見られるように、男性では現在のパートナーとの間の子どもがあるかないかによる同伴行動の違いはほとんどないが（ $F=.13$ , n.s.;  $\eta=.07$ ）、女性ではパートナーとの間に子どもがいないグループの方が同伴行動の平均値が高くなっている（ $F=6.48$ ,  $p<.05$ ;  $\eta=.27$ ）。

これらは、いずれもパートナーからのサポートに関する分析結果（前述）と共通する傾向である。とくに女性で、パートナーのみに前の結婚の子どもがいるグループ、およびパートナーとの間に子どもがいるグループが、パートナーとの共同的な関係がやや弱いという回答をしがちであった。父子関係がすでに存在しているところに、既存の親子関係を持たずに後から加わることになる継母の場合には、パートナーとのカップル単位の行動の機会が十分に作れないという問題に直面しやすいのかもしれない。新しいパートナーとの間に子どもが生まれることも、単純にステップファミリーの家族の絆を強めるというわけではないようだ。そして、カップルの間に子どもが誕生し、その子の子育てに関わっていくことによる家族関係の変化の影響を受けやすいのも女性の方であることが示唆されている。

**表Ⅳ-17 同居年数別・パートナーとの同伴行動の平均値**

| 同居年数    | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|---------|------|-----|------|
| 未同居／半同居 | 2.67 | 25  | .63  |
| 1年未満    | 3.19 | 21  | .47  |
| 1-2年未満  | 3.15 | 15  | .68  |
| 2-4年未満  | 3.15 | 25  | .58  |
| 4年以上    | 2.82 | 24  | .93  |
| 合計      | 2.98 | 110 | .70  |

注) 分散分析による検定  $F=2.77, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.31$

**表Ⅳ-18 前の結婚での子どもの有無別・パートナーとの同伴行動の平均値**

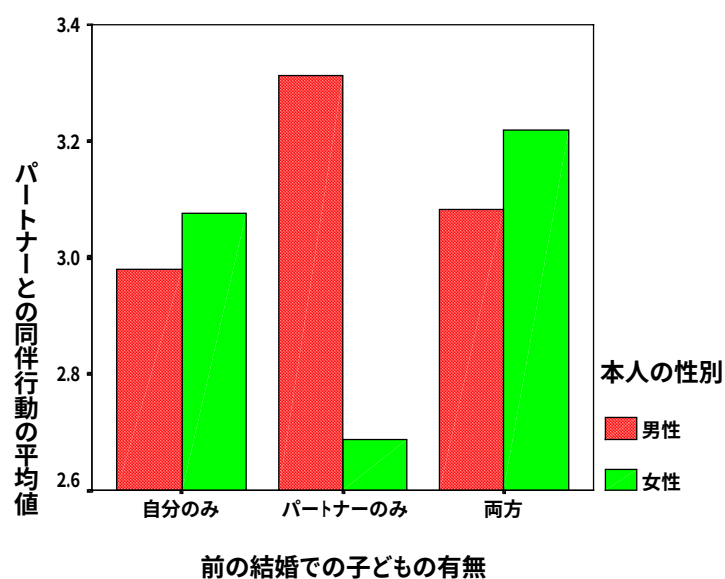
| 前の結婚での子どもの有無   | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|----------------|------|-----|------|
| 前の結婚の子は自分のみ    | 3.05 | 43  | .71  |
| 前の結婚の子はパートナーのみ | 2.80 | 44  | .74  |
| 前の結婚の子が両方にある   | 3.17 | 25  | .50  |
| 合計             | 2.98 | 112 | .69  |

注) 分散分析による検定  $F=2.68, p<.10$ ; 相関比  $\eta=.22$

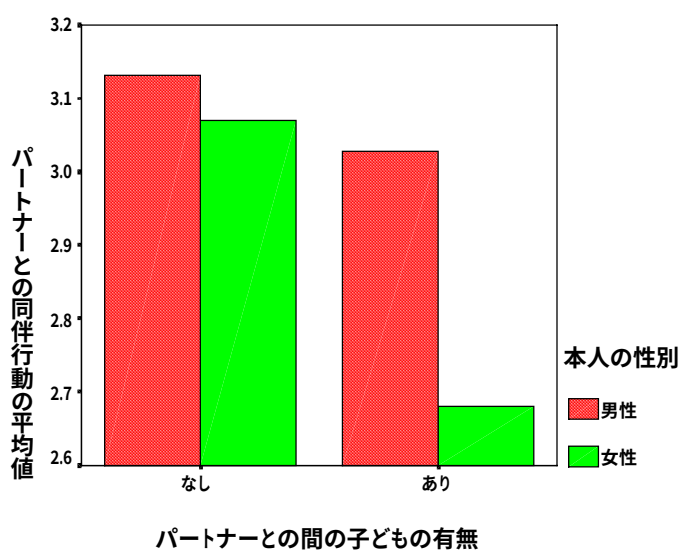
**表Ⅳ-19 パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーとの同伴行動の平均値**

| パートナーとの間の<br>子どもの有無 | 平均値  | 度数  | 標準偏差 |
|---------------------|------|-----|------|
| なし                  | 3.09 | 74  | .54  |
| あり                  | 2.76 | 38  | .89  |
| 合計                  | 2.98 | 112 | .69  |

注) 分散分析による検定  $F=5.75, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$



図IV-5 男女別・前の結婚での子どもの有無別・同伴行動



図IV-6 男女別・パートナーとの間の子どもの有無別・同伴行動

### (3) まとめ

パートナーからのサポートや同伴行動の程度自体は、男女によって差は見られなかった。しかし、(家族内ストレス源や家族関係満足度と同様に) パートナーからの肯定的なサポートや同伴行動の程度は、前の結婚での子どもの有無に関連している。現在のパートナーとの関係以前に子どもを持った経験がなく、初めて継母となった女性回答者は、パートナー

からの情緒的なサポートが少なく、同伴行動も少ないと認知する傾向がある。だが、同じ立場の男性（継父）にはそのような傾向は見られない。そこに男女差が存在する。

これまでの分析結果を総合すると次のように言えるだろう。ステップファミリーには多様な家族状況がありえるが、父子関係がすでに存在しているところに新たに継母という立場で未経験の子育てに直面する状況がもっとも大きな困難を生じやすい。その場合に、パートナーにもその困難が理解されず、支援されていないと感じる傾向が強い。少なくとも今回の調査データからは、継母子関係およびそのパートナー関係にもっとも大きな心理的負荷が課されることが示されている。一方、現在のパートナーとの間に新たに子どもが生まれることは、パートナー間の葛藤を増やすことはないにせよ、家族関係から生じるストレスを軽減することにもならない。むしろ、再婚後、新たに子どもをもった女性たちは、パートナーからの情緒的サポートや同伴行動が少ないと感じるようになる可能性がある。

同じような家族的位置についても、男性（継父）の場合には、家族関係において、それほど難しい立場に置かれることはあまりないように見える。少なくとも、ストレスを感じる程度は女性ほど強くない。子育てや家事など家庭内のことに関わる程度が男女で大きく異なっていることを反映しているのだろう。いずれにしても、家族の外側からのサポート（例えば、共通の経験をもつ当事者同士の情緒的なサポート）をもっとも痛切に必要としているのは、上記のような状況にある女性（継母）たちであると言えるだろう。

### **3. サポート・ネットワークとパートナー関係のストレスへの影響**

#### **(1) 家族についての悩み相談ネットワーク**

では次に、パートナー以外の人間関係（それが直接対面を基盤としたものであれ、主に電子メールのようなインターネットを使用して交流するものであれ）からの情緒的サポートに目を転じよう。問 15 では、家庭内の問題について悩みを相談したり、グチを言ったりする相手を 4 人まで想定してもらい、それらの相手（A さんから D さん）について、一連の質問をしている。

この相談ネットワークについては、まず次の 2 変数を取り上げる。①最大 4 人まであげてもらった相談相手の数を表すネットワーク規模、②A さんから D さんの 4 人相互に知り合い関係があるかどうかによって算出した「ネットワーク密度」<sup>1</sup>である。ネットワーク密度は、4 人全員が相互に知り合いならば 1、知り合いが一人もいなければ 0 の値をとる。つまり、回答者にとって悩みの相談相手となっている（最大）4 人の人たち同士が、回答者本人との関係とは別に、相互にどの程度連結しているかを示す尺度である（詳しくは、安田, 1997 および野沢, 1999a 参照）。

ネットワークの規模と密度については、男女別の平均値などを表 IV-20 に示した。最大 4 人までのネットワークの規模は、調査回答者の中の女性の平均値の方が男性の平均値よりも大きく（ $F=37.29$ ,  $p<.001$ ;  $\eta=.50$ ）、女性は男性の 2 倍に近い相談相手をもっている。すでに見たように、対象となった女性は家族に関する悩み（家族内ストレス源）も多いが、

悩みの相談相手（サポート源）も多いのである。ネットワークの密度自体は、男女間に差がない。しかし、女性に関してはネットワーク規模と年齢とが負の相関（相関係数  $r=-.25$ ,  $p<.05$ ）を示し、年齢が低いほど家族関係の悩みを相談する相手が多いという傾向があるのに、男性に関してはそのような傾向は弱い（ $r=-.12$ , n.s.）という点に男女差が存在する。

4人の相談相手に関しては、①血縁関係がある、②長距離（2時間以上かかる場所）に住んでいる、③同性である、④ほぼ同年齢（上下3歳程度）である、⑤週1回以上話す（電話を含む）、⑥再婚家族経験者である（本人か親が再婚した）、⑦家族観が似ている、⑧週1回以上メールをやりとりする、という8つの条件に合う人が何人含まれているかを算出し、8つの変数を作った。こうした相談相手ネットワークを構成する人々の特性に関しても、男女で差が見られる（表IV-21）。全体に相談相手が多いので、いずれのタイプの相談相手も女性の方が多く保持している。

**表IV-20 男女別・ネットワーク規模の平均値**

| 本人の性別 |      | ネットワーク<br>規模(4人まで) | ネットワーク<br>密度 |
|-------|------|--------------------|--------------|
| 男性    | 平均値  | 1.83               | .27          |
|       | 度数   | 30                 | 10           |
|       | 標準偏差 | 1.58               | .32          |
| 女性    | 平均値  | 3.37               | .22          |
|       | 度数   | 83                 | 68           |
|       | 標準偏差 | 1.01               | .25          |
| 合計    | 平均値  | 2.96               | .22          |
|       | 度数   | 113                | 78           |
|       | 標準偏差 | 1.36               | .26          |

注) ネットワーク規模：分散分析による検定  $F=37.29$ ,  $p<.001$ ; 相関比  $\eta=.50$   
 ネットワーク密度：分散分析による検定  $F=.33$ ,  $p=.57$ (n.s.); 相関比  $\eta=.07$

**表IV-21 男女別・相談相手（4人まで）に含まれる諸特性保持者数の平均値**

|                         | 男性  | 女性   | F 値   |     |
|-------------------------|-----|------|-------|-----|
| 相談相手(A-D)のうち血縁者数        | .27 | .70  | 7.97  | **  |
| 相談相手(A-D)のうち長距離者数       | .37 | 1.13 | 10.51 | **  |
| 相談相手(A-D)のうち同性数         | .77 | 3.04 | 86.13 | *** |
| 相談相手(A-D)のうち同年齢数        | .90 | 2.20 | 32.48 | *** |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数    | .97 | 1.45 | 2.71  |     |
| 相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数    | .37 | .81  | 4.75  | *   |
| 相談相手(A-D)のうち家族観類似数      | .77 | 2.18 | 31.02 | *** |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数 | .50 | 1.39 | 11.21 | **  |

注) 分散分析による検定結果 \*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ .

## (2) 相談ネットワークの特性とパートナー関係

では、相談相手のネットワークとパートナー間のサポートとの間にはどのような関連があるのだろうか。多くの相談相手をもつ人は、パートナーからも情緒的なサポートを多く得ているのだろうか。それとも、パートナーと支援的な関係が築けていない人ほどそれ以外の相談相手が多いのだろうか。パートナー関係に関する3変数とネットワークに関する10変数との関連（相関係数）を男女別に検討してみた。

女性に関する結果（表IV-22）をみると、ネットワーク規模およびメールによる高頻度接触者数、同性者数、同年齢者数、再婚家族経験者数という（相談相手の同質性を示す）一連の変数とパートナーとの同伴行動との間に正の相関がある。このような特徴の相談相手を多く持つ回答者ほどカップル単位の行動が多くなっている。メールによる高頻度接触者数、同性者数が多い人は、パートナーからの情緒的サポートが多い人でもある。逆に、パートナーとの葛藤が多い人は、同性の相談相手が少ないという傾向もある。

**表IV-22 ネットワーク特性とパートナー関係変数の相関（女性のみ）**

|                         | パートナーからのサポート     | パートナーとの葛藤 | パートナーとの同伴行動      |
|-------------------------|------------------|-----------|------------------|
| ネットワーク規模（4人まで）          | .09              | -.07      | .28*             |
| ネットワーク密度                | .05              | .17       | .08              |
| 相談相手(A-D)のうち血縁者数        | .07              | -.05      | -.05             |
| 相談相手(A-D)のうち長距離者数       | .11              | -.10      | .07              |
| 相談相手(A-D)のうち同性数         | .19 <sup>†</sup> | -.23*     | .27*             |
| 相談相手(A-D)のうち同年齢数        | -.01             | -.10      | .25*             |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数    | .11              | .16       | .18              |
| 相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数    | .10              | -.10      | .19 <sup>†</sup> |
| 相談相手(A-D)のうち家族観類似数      | .06              | .01       | .12              |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数 | .19 <sup>†</sup> | -.04      | .32**            |

\*\*相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

†相関係数は 10% 水準で有意（両側）

**表IV-23 ネットワーク特性とパートナー関係変数の相関（男性のみ）**

|                         | パートナーからのサポート     | パートナーとの葛藤         | パートナーとの同伴行動 |
|-------------------------|------------------|-------------------|-------------|
| ネットワーク規模（4人まで）          | .09              | -.27              | .17         |
| ネットワーク密度                | .57 <sup>†</sup> | -.56 <sup>†</sup> | .10         |
| 相談相手(A-D)のうち血縁者数        | .10              | -.08              | .14         |
| 相談相手(A-D)のうち長距離者数       | -.09             | .03               | .01         |
| 相談相手(A-D)のうち同性数         | .10              | -.39*             | -.03        |
| 相談相手(A-D)のうち同年齢数        | -.10             | -.32 <sup>†</sup> | .12         |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数    | .06              | -.32 <sup>†</sup> | .16         |
| 相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数    | -.12             | .02               | .20         |
| 相談相手(A-D)のうち家族観類似数      | .29              | -.09              | .38*        |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数 | -.07             | -.01              | .25         |

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

†相関係数は 10% 水準で有意（両側）



一方、男性に関しては、異なる傾向が表れている（表IV-23）。密度が算出可能な有効ケース数が少ない（ $n=10$ ）ことには留意しなければならないが、ネットワーク密度がパートナーからの情緒的サポートとの間に強い正の相関があり、逆にパートナーとの葛藤の間には強い負の相関があるという点が男性に特徴的である。そして、女性回答者に特徴的だった一連のネットワーク特性と同伴行動との正の相関は、男性にはほとんど見られない。男性の場合には、それらに代わって、家族観が類似している相談相手を多く持っているほどパートナーとの同伴行動が多くなるという独自の傾向がある。そして、同性・同年齢で会話頻度の高い（同質的で強い関係にある）相談相手を多く持つ回答者は、パートナーとの葛藤のレベルが低いという、負の相関が顕著である。

男女ともに、パートナー間の援助性がそれ以外の情緒的サポート・ネットワークと競合しているのではない、という点で共通している。つまり、パートナーがサポートしてくれないからそれ以外の人たちに相談のネットワークを広げるというわけではない。むしろ両者は相互に促進し合っていると言える。ただし、女性は同質的で大きな強い紐帯のネットワークを持つことが「パートナーとの同伴行動の高さ」と関連するのに対して、男性では同質的で連帯した強い紐帯のネットワークを持つことが「パートナーとの葛藤の少なさ」に関連する。このジェンダー差も興味深い。

### **(3) パートナー関係とネットワークとストレス**

最後に、パートナーとのサポート関係および相談ネットワーク特性が、回答者のストレス状況にどのように関連しているかを検討してみたい。これも男女別に相関係数を見てみよう。

女性に関する結果（表IV-24）は、パートナー関係の3変数であるサポート、葛藤、同伴行動のいずれもが、心理的適応状態に関する3変数（家族外ストレス源を除く）と関連が強いことを示している。パートナーからの情緒的サポートや同伴行動が多く、葛藤が少ないほど、家族内ストレス源やストレス反応が小さく、家族関係満足度が大きくなる傾向が顕著である。つまり女性に関しては、パートナーとの肯定的・否定的関係性が全体的に家族関係の悩みや不満を規定している。

それ以外では、相談ネットワークに再婚家族経験者が多く含まれているほど、家族内ストレス源が少なく、家族関係満足度が高いという傾向が存在する。年齢・性別などの一般的な同質性ではなく、特別な家族経験を共通に持っているという点での同質性を基盤とした相談相手を多く持つということこそが、ステップファミリーの女性たちの心理的適応を促進しているようにみえる。さらに、ネットワーク密度と家族内ストレス源との弱い負の相関、頻繁にメール交換する相談者の数と家族関係満足度との弱い正の相関もある。要するに、パートナーとの間に支援的・伴侶的な関係を築き、ステップファミリー的家族経験をもつ人を含む、より連帯した（相互連結した）相談相手のネットワークを持っている女性たちが、現在の家族状況にうまく適応している。

**表Ⅳ-24 パートナー・ネットワーク特性とストレス関連変数の相関（女性のみ）**

|                         | 家族内<br>ストレス源      | 家族外<br>ストレス源     | ストレス<br>反応 | 家族関係<br>満足度      |
|-------------------------|-------------------|------------------|------------|------------------|
| パートナーからのサポート            | -.36**            | -.14             | -.33**     | .54**            |
| パートナーとの葛藤               | .35**             | .20 <sup>†</sup> | .25*       | -.39**           |
| パートナーとの同伴行動             | -.37**            | -.07             | -.34**     | .54**            |
| ネットワーク規模（4人まで）          | .01               | .09              | -.07       | .14              |
| ネットワーク密度                | -.23 <sup>†</sup> | -.16             | -.10       | .11              |
| 相談相手(A-D)のうち血縁者数        | .02               | -.01             | .04        | .08              |
| 相談相手(A-D)のうち長距離者数       | .02               | .13              | -.05       | .01              |
| 相談相手(A-D)のうち同性数         | -.01              | -.07             | -.13       | .13              |
| 相談相手(A-D)のうち同年齢数        | -.06              | .02              | -.18       | .09              |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数    | -.09              | .03              | -.09       | .17              |
| 相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数    | -.23*             | -.08             | -.11       | .23*             |
| 相談相手(A-D)のうち家族観類似数      | -.10              | .04              | -.17       | .05              |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数 | -.13              | .15              | .06        | .19 <sup>†</sup> |

\*\*相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

†相関係数は 10% 水準で有意（両側）

**表Ⅳ-25 パートナー・ネットワーク特性とストレス関連変数の相関（男性のみ）**

|                         | 家族内<br>ストレス源      | 家族外<br>ストレス源 | ストレス<br>反応 | 家族関係<br>満足度       |
|-------------------------|-------------------|--------------|------------|-------------------|
| パートナーからのサポート            | -.31 <sup>†</sup> | -.11         | -.20       | .28               |
| パートナーとの葛藤               | .55**             | .37*         | .57**      | -.37 <sup>†</sup> |
| パートナーとの同伴行動             | -.16              | .25          | .12        | -.07              |
| ネットワーク規模（4人まで）          | -.13              | -.06         | .04        | .08               |
| ネットワーク密度                | -.64*             | -.35         | -.16       | .45               |
| 相談相手(A-D)のうち血縁者数        | -.23              | -.22         | .28        | .15               |
| 相談相手(A-D)のうち長距離者数       | .15               | -.13         | -.13       | -.10              |
| 相談相手(A-D)のうち同性数         | -.21              | -.07         | -.11       | .36 <sup>†</sup>  |
| 相談相手(A-D)のうち同年齢数        | .02               | .10          | -.11       | -.17              |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数    | -.04              | -.16         | -.12       | .05               |
| 相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数    | .19               | .09          | .17        | -.24              |
| 相談相手(A-D)のうち家族観類似数      | -.02              | .01          | -.02       | .06               |
| 相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数 | .01               | .23          | .09        | -.17              |

\*\*相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

†相関係数は 10% 水準で有意（両側）

男性についての分析結果に眼を転じてみると、ここでも女性との差異が存在する（表Ⅳ-25）。パートナーとの関係については、パートナーとの葛藤の程度のみが、4つのストレス関連変数のすべてととくに強い相関を示している。パートナーとの葛藤の程度が高いと、家族内ストレス源、家族外ストレス源、ストレス反応が高くなり、家族関係満足度は低くなる。しかし、女性の場合と比較すると、パートナーからの情緒的サポートや同伴行動との相関は相当に小さくなっている。つまり、男性回答者の場合は、家族関係の悩みや不満

の大きさが、パートナーからの否定的な評価や対立的な働きかけによって規定されており、パートナー間の援助性・共同性など肯定的な側面それ自体はあまり影響していない。

男性は、ネットワーク密度が家族内ストレス源の程度と強い負の相関を示している点も特徴的である。やはりネットワーク密度を算出できるケース数が少ない（ $n=10$ ）ことから確定的なことは言えないが、ネットワーク密度と同性（男性）相談相手数との間に強い正の相関がある（ $r=.67, p<.05$ ）ことを考慮に入れば、男同士の相談仲間のような連帯が生まれることが、家族内の悩み（ストレス）を軽減する効果をもつのかもしれない。

ネットワーク密度と家族内ストレス源との間の負の相関は、男性ほどではないが女性の場合にも存在していた（表IV-24）。ネットワーク密度の心理的效果については、離婚を経験した女性を対象とした米国の研究が、密度の低いネットワークを持っていると離婚後の生活への適応が促進されることを示唆している（Wilcox, 1981）。また、一般の母親を対象とした最近の日本の研究は、リスクを抱えた子育て状況にある場合、ネットワークの密度が中程度のときにストレス（育児不安）が軽減されるという知見を導いている（松田, 2001）。しかし、そのようなメカニズムは、非通念的・非伝統的な家族構造・家族状況にある親たちには必ずしもあてはまらないのかもしれない（春日, 1989; 石川, 1995 を参照）。つまり、ステップファミリーのように社会的に少数派である場合には、特別な家族経験の共有・理解ができる連帯した相談相手のネットワークを形成し、そのメンバー間で独自の家族意識や価値観を創出し共有することこそが重要であり、心理的適応効果をもたらすのではないだろうか（野沢, 2001）。しかし、このような効果が生み出される詳しいメカニズムについては、さらなる探究が必要である。

#### **(4) まとめ**

アメリカの全国調査データ（NSFH 1987-88）を分析した研究（Marks & McLanahan, 1993）は、ステップファミリーの母親や父親たちが親族や非親族（友人など）と交換するサポートの量は伝統的な家族の場合とさほど変わらないことを示唆している。今回の私たちの調査設計では他のタイプの家族形態（家族構造）との比較はできない。しかし、相対的に強いストレス下にあると見られる今回の女性回答者の場合も、約3人に2人（63.9%）が4人以上の相談相手を持っており、情緒的サポート・ネットワークは比較的大きいように思える（ただし、男性は4人に1人が相談相手を全く持っていない）。また、今回の調査の回答者は、他の一般的な調査データ（日本家族社会学会・全国家族調査研究会, 2000; 石原 1999）と比べると、男女ともパートナー（配偶者）からの情緒的サポートがかなり高い人たちでもある。調査の対象となったステップファミリー・メンバーは、決して社会的孤立者ではなく、一定のサポート源を保持している人たちである。

本章での分析によれば、ステップファミリーのパートナー同士の援助的・同伴的な関係は、パートナー以外の相談ネットワークと競合するわけではない。その点、既婚女性一般を対象とした調査結果（野沢, 1999b）と概ね一致している。むしろ、より大きく、連帯性

と同質性が高いネットワークは、パートナー間の援助的・伴侶的関係の強さと両立しているように見える。そうしたネットワークをもつ場合、女性ではパートナーとの間に同伴行動が多く、男性ではパートナーとの葛藤が少ない。

やはりアメリカの既存研究 (Kurdek, 1989) が示唆しているように、初婚・再婚の別を問わず、心理的ストレス（ディストレス）に対して一貫して大きな影響をもつのがパートナーからのサポートであることは、今回の分析でも確認された。ただし、男性と女性では、影響の仕方が異なるようだ。女性の場合は、パートナーとの肯定的・否定的関係性と同伴行動のすべてが、家族内ストレス源の多さやストレス反応の大きさ、家族関係満足度に影響を与えているが、男性の場合は、とくにパートナーとの葛藤という否定的な関係性のみが、ストレス源の多さ、ストレス反応の高さ、家族関係満足度に影響を与えていた。男性にとっては、パートナー間の衝突や対立こそが心理的ストレスと深く関連している。

さらに相談ネットワークについての分析結果は、（とくに女性に関して）同じような家族経験をしている同質的な相談相手がいるという紐帯の質に関わる要因が、そして（とくに男性に関して）密度というネットワークの構造に関わる要因が、ステップファミリーにおける親たちの心理的適応状態に影響を与えていることを示唆している。再婚家族を経験している相談相手が多く、ネットワーク密度が高いほど、家族内ストレス源が低減し、家族関係満足度が高まる傾向があった。サポート・ネットワークの同質性と連帯性が、どのような意味で、どのようなプロセスによって、ステップファミリーの家族生活適応に効果をもたらすのかという問題は、今後の重要な研究課題のひとつである。

#### 【注】

<sup>1</sup> ネットワーク密度 (density) は、実際に存在する関係数を最大可能な関係数で除して求める。具体的には、問 15 で「家族についての悩みやグチを話せる方」として挙げた人数（最大 4 人）を  $n$  人とし、問 16 でその  $n$  人相互の組み合わせのうち「交流がある」または「親しく交流している」と回答された数（実際に存在する関係数）を  $t$  とすると、ネットワーク密度  $= t / \{ n (n - 1) / 2 \}$  という計算式によって求められる。ただし、ネットワークの規模 ( $n$ ) が極端に小さいと密度の意味概念が捉えにくくなるので、今回の分析からは  $n$  が 2 以下のケースを除外している。

#### 【参考文献】

稲葉昭英 (2001) 「結婚・離婚・再婚・ディストレス」(未発表論文)。

石原邦雄 (編) (1999) 『妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所 [復刻版：東京都立大学出版会 2001]。

石川准 (1995) 「障害児の親と新しい『親性』の誕生」井上真理子・大村英昭 (編) 『ファミリーリズムの再発見』世界思想社, 25-59。

春日キスヨ (1989) 『父子家庭を生きる—男と親の間』勁草書房。

Kurdek, L. A. (1989). Social support and psychological distress in first-married and remarried newlywed husbands and wives. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 1047-1052.

- Marks, N. F., & McLanahan, S. S. (1993). Gender, family structure, and social support among parents. *Journal of Marriage and the Family*, 55, 481-493.
- 松田茂樹（2001）「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52, 33-49.
- Nielsen, L. (1999). Stepmothers: Why so much stress? a review of the research. *Journal of Divorce & Remarriage*, 30, 115-148.
- 日本家族社会学会・全国家族調査（NFR）研究会（2000）『家族生活についての全国調査（NFR98）』No.1.
- 西村純子（2001）「家族構造と家族生活ストレインーひとり親、ふたり親、ステップ・リレーション」渡辺秀樹（編）『現代日本の親子関係』文部省科学研究費基盤研究（A）：家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No.2-2, 91-110.
- 野沢慎司（2001）「ネットワーク論的アプローチ家族社会学のパラダイム転換再考」野々山久也・清水浩昭（編）『家族社会学の分析視角』, ミネルヴァ書房, 281-302.
- 野沢慎司（1999a）「家族研究と社会的ネットワーク論」野々山久也・渡辺秀樹（編）『家族社会学入門』文化書房博文社, 162-191.
- 野沢慎司（1999b）「夫の援助とネットワークの援助は競合するか？ー東京郊外と地方都市における妻たちの援助動員」石原邦雄（編）『妻たちの生活ストレスとサポート関係ー家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所〔復刻版：東京都立大学出版会 2001〕, 239-261.
- Wilcox, B. L. (1981). Social support in adjusting to marital disruption: A network analysis. In Gottlib, B. (ed.), *Social Networks and Social Support*. Sage, 97-115.
- 安田雪（1997）『ネットワーク分析』新曜社.